

噴火口十字に飛び交ふつばくらははなれわざこそしばしみ入りぬ。
人を憎むあまり小さき心とは思へど足らぬおのれなりけり。
三日四日噴火口壁に静座してうつしよのなやみかげもあらなく。
青空に意氣の男の命とも大阿蘇は雄々しくけむりはくなくなり。
超然と自己の光りに生くる日ぞま幸の人のむれに入れるも。
強く強く生きよと轟く大あその力を今は身につつみけり。
ものみなのもだねわすれてうつしよを吾の心の光りとぞせむ。

雨よ降れ

英法二年一

雅

男

雨よ降れこのもの音の夜にさねて幾夜寝がての我が惱みかも
湯に入れば水ひたと漂へりかすかに壁の香は匂ひつゝ
湯は溢る旅に疲れし身を入れて五右衛門風呂の半時を笑む
客往にて皿に残れる紅の胡桃さらく内に浸れり
肉の香よほのかに夢をかすめつゝ胸にし入らば人は死ぬ可し
潮見崎底の小石に手をつきて乙女招けば白雲の湧く
あはれ此の夕日に赤き船旗の崎の港に残る悲しみ

磯の香の強し匂へば日に干せ網もむしろも海のものなり
この松は浮世繪の松此の家は浮世繪の家千々石美し
徐ろに過ぎ行く時の底知れぬ方に怖ちて我旅にあり
すたすたと濱に出れば空曇り悶あらず砂ほてり居り
かにかりに一年あまり世にすねてよみがへりたる夜のマドンナ
まなし笑み輕げにあぐる爪先の見眼せはしき我なりしかな
雨あがり靴底深く夜を踏みて辿れば水にうつる町の灯

短歌五首

一部丙二年 和田貞臣

立太子禮を祝ひ奉りて

幾ちよとかきらぬ田鶴の聲すなりいや榮わゆくみよのしるしに

新開大神宮にて敬神黨志士を偲びて

古の人なつかしく思ひねの枕にかすむ春の夜廻月

太神宮參詣の途次薄葉の渡にて

神の森見ゆる薄葉の薄衣そよ吹く風はあやに涼しも

亡き人を偲びて